



社団法人宮城県自動車整備振興会
宮城県自動車整備商工組合

いま、伝えたい被災地からのメッセージ

被災地の自動車整備団体を代表し、宮城県自動車整備振興会様に復興の様子や震災後1年を経たの想いなどをお伺いしました。



専務理事
渡辺 敏晴 様



指導部 部長
薄木 正博 様



総務部 部長
鈴木 博之 様

自動車整備業における 宮城県の復興状況はいかがですか？

2012年2月17日現在、全壊・流出・半壊した宮城県の会員工場の内、59.0%が完全復旧を果たしています。今は車販（新車・中古車）が持ち直し、登録台数は震災前と同水準まで戻ってきました。復旧が落ち着いた会員からは、「何か貢献・支援できることはないか」との問い合わせもいただきますが、皆さんが一生懸命に仕事をして税を納め、雇用を増やすことが、一番の復興支援になるとお答えしています。

被災体験をもとに、今後の対策として 何かアドバイスはありますか？

震災のとき、電話は繋がりませんでした。携帯のメールは通信できましたので、災害時に会員側から生存報告ができるような連絡網を整えておくよと思います。また、災害発生時のリーダーや関連団体ごとの支援内容の分担などを、事前に対策会議で決めておくことも必要だったでしょう。それから、燃料不足への備えとして、ガソリンを満タンにした公用車を、1台でもいいので常備しておくことです。



自動車整備という仕事について、 震災後なにか感じたことはありますか？

被災地のインフラを整備するのに、クルマは必須です。この震災で、電車も飛行機も船も使えなかった中、一番に復旧したのは高速道路であり、真っ先に動いたのはクルマでした。そのクルマとドライバーの安全を守る我々自動車整備業界は、絶対になくしてはならないものです。今までもそうした自負心をもって活動していましたが、震災により改めてその価値と素晴らしさを実感しました。全国の皆様も是非今まで以上に誇りを持って、日々の仕事に取り組んでいただければと思います。

最後に、被災した会員の皆様や 全国の振興会にメッセージをお願いします。

被災した会員の皆様には復興という難局に際して少しでもお役に立てるよう、熱い気持ちを持って行政に働きかけるとともに、皆様の健やかな経営に貢献できるよう努めて参ります。また、この度の震災では、物資の支援をはじめ、振興会のネットワークに本当に助けられました。心から感謝しています。もしも皆様に何か困ったことがあったときは、意地でもこのご恩をお返ししたいと思います。

編集後記

震災から1年という節目のときに被災地を訪れ、お客様の壮絶な体験や感慨深いお話を伺う事ができ、編集者一同、心より感謝しております。そのお話からは、テレビや新聞では伝わりきれない苦悩や奮闘の記憶と共に、復興へのゆるぎない意志と決意がひしひしと伝わってきました。お客様に教えていただいたことはあまりにも多く、その全てを本誌に書きつづることができないのを口惜しく思います。宮城県、岩手県、そして福島県をはじめ、被災地の1日も早い復興をお祈りするとともに、取材に快くご協力くださった皆様方に、改めて厚く御礼申し上げます。



保守点検のおすすめ

ANZEN製品を長くご利用いただくため、保守点検サービス（有料）のご利用をおすすめします。お近くの営業マンまでお問い合わせください。

24時間サービス体制

ANZEN製品を「安心」してご利用いただくために、24時間サービス（ボイスワープ）対応をいたしております。営業時間外、および休日におけるサービス電話受付ができます。担当の営業所の電話に連絡していただければできる限り迅速な対応をいたします。

ANZENカスタマーサービス

☎ 0120-01-6361 当社の製品およびサービス、その他に関するお問い合わせは左記のフリーダイヤルまでお気軽にどうぞ。受付時間：月～金（AM9：00～PM5：00）

ANZENホームページ

http://www.anzen.co.jp ホームページ「ANZEN Web」ではANZENの最新情報を提供しています。



CHARGE

東日本大震災から1年

東北・整備工場の“現在”



東日本大震災から1年。かつてない広範囲に及んだ被災地の中でも、その中心となった太平洋側の東北各県の自動車整備工場が、復旧し始めています。

特に津波による流出・倒壊被害の相次いだ宮城県・岩手県の被災整備工場においては、両県合わせ、約半数の工場が復旧を果たしています。しかし内訳を見ると、被災工場数の多かった宮城県では復旧率が約6割にのぼるのに対し、岩手県では約2割に留まっており、復旧には地域差もあるようです。

また、依然として復旧作業中の整備工場は数多く存在しています。

人々の生活や物流を支える上で欠かせない自動車。東北の復興を後押しする大きな活力として、自動車の安全を支える整備工場の1日も早い復旧が望まれています。

被災整備工場実態調査結果

■調査：宮城県・岩手県自動車整備振興会調べ
(2012年2月現在)

自動車整備振興会	宮城県	岩手県
会員数 ※1	1,653	1,176
被災整備工場数 ※2	332	90
※3 完全復旧	復旧数	21
	復旧率	23%
一部復旧	整備作業している	39
	整備作業していない (外注受入り含む)	— ※4
計	78	39
休業中	28	18
廃止	30	12

※1:会員数は平成23年3月11日現在の特別会員を除いた数
※2:全壊・流出及び半壊以上
※3:認証及び指定の基準に適したことを意味
※4:未調査

CHARGE Vol.55 発刊にあたって

去る2011年3月11日、東北地方はかつてない大地震に見舞われ、震源に近い沿岸部では多くの方々津波による被害を受けました。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げますとともに、弊社といたしましても日々の活動を通じて被災地の再建に少しでも貢献できるよう努力してまいり所存です。

今回のCHARGE Vol.55では、かつてない困難を乗り越え、復興・再生への道を切り開いていった現地のお客様を取材させていただきました。

取材を通して伝わってきたのは、「1日も早く困っているお客様を助けたい」という強い想いと、「復興を支える車の安全を守りたい」というゆるぎない使命感、そして困難を乗り越えるために支え合う「人と人の絆の力」でした。自動車整備業に携わるすべての人達に、いま一度、この仕事の重要性和誇りを再認識していただき、また災害が発生した際、一人ひとりがどう行動すべきかを改めて考えていただく契機となることを願い、被災地の“現在”を特集いたします。

株式会社島山自動車

営業部：岩手県下閉伊郡岩泉町小本字下中野88-2
Tel 0194-28-2268
サービス部：岩手県下閉伊郡田野畑村松前沢9
Tel 0194-33-2952



代表取締役社長
島山 安文 様



販売店の店舗内には、島山社長が指さす高さまで津波が押し寄せた



沿岸部にほど近い田野畑村の整備工場には3m以上の津波が到達した

岩手県北東部に位置する雄大な自然と豊かな風土に恵まれた地。そこで脈々と営まれてきた水産業や酪農の発展を支え、地域密着型のサービスを提供し続けているのが、今回訪問した(株)島山自動車です。震災と津波の猛威は販売店と沿岸部近くの整備工場にも達し、甚大な被害をもたらしました。しかし、そんな過酷な状況下でありながらも「1週間後には復旧することを決意した」という島山社長のゆるぎない決断と実行力は、復興・再建の道を切り開いていきました。その功績は、島山社長を筆頭に総勢11名のスタッフ全員が奮い立ち、成し得た結果でもあります。困難に立ち向かい、前へ進み続けた島山社長に、この1年を振り返っていただきました。

県内屈指の速さで復旧を実現。社長の勇断が導いた再建への道

■ 震災と津波は販売店と整備工場に大きな被害をもたらした

1年前の3月11日。地震が発生したまさにその時、島山社長は岩泉町の販売店から田野畑村沿岸部にある整備工場にクルマに向かっての最中でした。「地震は運転していて気づかなかったが、周りの様子が異常に気づいた」という島山社長。一旦自宅に戻り、また工場へ向かってスタッフの無事を確認し、大津波警報が鳴り響く中、整備工場内の見回りを行いました。自身も避難しようとバックミラー越しに海側を見た時、遠くに見えたのは巨大な砂煙。「一瞬、火事が起こったのかと思いましたが、津波だったんですね。ほんの少しでも避難が遅れていたら自分も危険な状況だったと思います」(島山社長)。津波の被害を受けた整備工場は、押し流されてきた瓦礫などで埋もれ、壊滅的な状態にありました。沿岸部の整備工場より少し高台に位置する販売店にも、大人の胸ぐらいの高さまで津波が押し寄せ、お客様から預かっていたクルマや展示車両、店内のパソコンなどすべてが津波に押し流されてしまいました。「社員が皆無事だったことが救い」と、島山社長は当時の状況を赤裸々に話してくださいました。

■ “人材は宝”。社員のためにも、復旧を決意！

当時は電気・ガス・水道、あらゆるライフラインが絶たれ、日常生活もままならない状態でした。しかしそんな中でも、同社は1週間後には復旧作業に着手します。「復旧は1分1秒がものを言う世界。とにかくスピードを重視した」と島山社長が力強く語るように、同社はすぐに流されてしまったお客様の車両の捜索を始め、整備工場の再建に向けて動き出しました。「海水が引いてから必死で流されたクルマを探しました。100%満足していただけたかどうかはわかりませんが、とにかくお客様のクルマはすべて弁償しました」(島山社長)。復旧を決断した想いを何うと、「これから先どうなるかわからないし、また地震が起きるかもしれない。それでも“やるしかない”と思いました。社員の“やる気”も伝わって来ましたから。社員にはそれぞれ家族がいるし、生活を抱えている。とにかく先のことは考えずに、“社員のために”という思いでした。人材は宝です。彼らの生活を守っていくためにも、いち

早く環境を整えていかなければいけないと思いました。」と、島山社長は述べてくださいました。

とにかく全員が、いま出来る限りのことを精一杯行い、2~3ヶ月が過ぎる頃には発電機を使用し、車両整備が出来る状態まで復旧させることができたのですから、その努力と行動力には脱帽です。



車検機器は修理するよりも早いと判断し、すべて新品に入れ替えた



中には当時のまま残されたリフトもある再生できたリフトは現在も活用している

■ サービスの新たな柱として、BP事業の可能性に期待

震災を経験して意識した点については、「お客様情報の管理です。店を再開するにあたって助かったのは、瓦礫の中から水浸しの売掛台帳が見つかったことです。1ページずつ開いて根気良く乾かした結果、90%以上のデータを読むことができました。震災を機に、社員には顧客データのバックアップを必ず持ち帰るようにさせています」との事でした。最後に、今後の展望について島山社長に伺いました。保有母体は3~4割減少。その分をカバーするべく、同社は今まで導入していなかったBP事業に着手することを決意したとのこと。今年の3月には新聞の折り込みチラシ広告を配布し、同社の存在と新規客へのメッセージを発信しています。「今まで以上に、誠意を込めたサービスを提供していくことが大事でしょうね」と島山社長。原点を見つめなおすとともに、新たな可能性に果敢に“挑戦”していく同社。地域で復興を成し遂げたパイオニアとして、これから多くの人達に勇気と希望を与えていくことでしょう。



今後の鍵を握るBP事業に、整備するメカニックの士気も高まる

三菱ふそうトラック・バス株式会社 東北ふそう 仙南支店

宮城県岩沼市空港南4-1-4
Tel 0223-23-4710



仙南支店長
大浪 光男 様



仙南支店工場長
鯨岡 拓也 様



白石工場
白石工場長
穴戸 勝博 様



多忙ながらも平穏な風景を取り戻した整備工場

東北ふそう仙南支店は、太平洋に面した宮城県の南東部、仙台空港の程近く、物流センターが密集する仙台空港・岩沼臨空流通工業団地の一角にあります。一年前のあの日、一帯は津波により浸水し、同店も2階部分を除いて全てが水没。甚大な被害を受けました。しかし、社員の的確な判断と行動が幸いし、同店の従業員46名全員が、一人として怪我も負うことなく避難。3月13日には復旧活動に入り、通電した8月からは急ピッチで再開準備を進め、被災から半年後の9月3日にリニューアルオープン。晴れて完全復旧を果たしたのでした。それから更に半年、広大な敷地に満車のトラックを抱えて忙しく稼働する同店に、復旧までのエピソードや教訓などを伺いました。



震災の記憶を伝える津波の高さを記したプレート

“人”の力、“絆”の力こそが至高の災害対策

■ マニュアルではなく“人命第一”の判断が命運を分ける

「地震がきたら、とにかく“人命第一”に自分の判断で行動しなさい」。3.11の二日ほど前に地震があったとき、支店長の大浪さんは社員にそう話していたそうです。そして大震災当日、大浪さんは外出中、仙南支店工場長の鯨岡さんは、白石工場長の穴戸さんと共に仙台本社にて会議中で、仙南支店にはまさにリーダーが不在でした。地震から約10分後、大浪さんが店舗に戻ると、店内にはパソコンや割れたガラスが散乱していましたが、社員は既に全員避難した後でした。地震がきたら店内・工場内に放送を流すスタッフを決めてあったという同店。速やかな連絡と各人の的確な判断で、全員が事なきを得たのです。「工場内はスプリンクラーが通路一面に落下していました。マニュアルを頼って判断が遅れたら、大事になっていたでしょうね」と大浪さん。「各々が自分はどう動くのかという意思を育てておくことが大切」だと気づかされたそうです。



2階の会議室には被災直後から復旧までを記録した写真が何枚も掲示してある

■ 誠意とチームワークで困難を乗り越え復旧

店内を確認した大浪さんが避難して約2時間後、辺りには津波が押し寄せました。水が引いたのは3月13日。「お客様のクルマが気になり、被害がなかった2階に集まって、入庫していた車両を思い出す限りホワイトボードに列記しました」と鯨岡さんは振り返ります。そしてそれをもとに被災を免れた白石工場に貼紙を作り、手分けして見つけた車両に貼って回ったそうです。「お客様の反応はまちまちでしたが、とにかく謝るしかなかく、本当につらい仕事でした」(鯨岡さん)。工場の復旧に取り掛かったのは車両探しの後。残った建屋を皆で掃除し、4月8日に本部長の承認を得てからは瓦礫の撤去を開始。設備もオーバーホールされました。しかしその間、復興に携わる車両の整備依頼も多く、「お客様の期待に応えようと、発電機を持ち込んで4スツール

を準備し、5月頃からは整備も始めました」と鯨岡さん。「それでも対応できない分は、穴戸さん率いる白石工場が全て引き受けてくれた」と話します。仙南支店に電気が通ったのは、実に7月も末のことでした。9月3日に再スタートを切ってから半年。現在では流出した車両や部品・書類手続きもほぼ解決し、約4700件の顧客を保持しているという同店。震災後のチームワークと誠意あふれる対応が、同店の再生を軌道に乗せたのでしょう。

■ 震災を通じて“絆”の力を実感

東北を襲った津波は、被害と共に様々な教えを残して去りました。大震災を機に、同店は非常時の移動手段に、社員とお客様を想定して40台の自転車を購入。さらに、津波から逃げ遅れたときは2階で待機できるよう、食料や毛布なども蓄えました。しかし、どれだけ備えをしようとも“人”に勝る備えはないと、3人は異口同音に語ります。「重要なのは、電話一本で来てくれる仲間がどれだけいるかということです」と鯨岡さん。穴戸さんは「文明の利器もお金も役に立たなかった中、お客様や取引先が食べ物を運び、道具を貸してくれました」と感謝しています。大浪さんは「日頃足を運び顔を合わせている人達だからこそ、協力してくれたのでしょう。効率化とはいえ、パソコンの付き合いだけではそうした絆は生まれません」と締めくくりました。地震と津波であらゆる“モノ”を失っても、“人”の力で再建された東北ふそう仙南支店。復興需要で多忙を極めるその姿からは、地域復興に貢献し、“絆”の力で自分たちを支えてくれたお客様の役に立ちたいという、強い想いが伝わってきました。



インフラと燃料が絶えた時のために40台の自転車を用意



店舗入り口には“絆”を象徴する寄せ書きが飾られている